

飼料イネ乾田直播栽培における播種形態と発芽率の関係

鈴木淑恵・小畑 寿・藤井真理
（宮崎県畜産試験場）

Yoshie Suzuki, Hisashi Obata and Mari Fujii :
Relationship between the Sowing Methods in Dried Paddy Field and Germination Percentage

飼料イネの省力栽培技術として乾田直播栽培が有望であるが、気象条件や圃場の状態に左右される不安定な苗立ちが障害となり、その取り組みは少ない状況である。そこで本試験では、播種の方法や播種深度等の手法的な条件と苗立ち率の関係を調査し、安定した苗立ちの確保について検討した。

1. 材料および方法

1) 試験1：播種方法と苗立ちの関係

供試した品種は「スプライス」で、2001年5月18日に播種した。播種量は5kg/10aで、試験規模は1区画4m²とした。設置した試験区分は、対照区、コート処理区、催芽処理区、種子消毒区の4区分で、対照区以外は散播に加え点播および条播を組み合わせた。種子の前処理として、コート処理区は2日間浸種した後過酸化石灰を粉衣した粉を、催芽処理区は鳩胸状態まで浸種した粉を、種子消毒区はチウラム・ベノミル水和剤中で浸種した粉をそれぞれ使用し、対照区は乾粉を使用した。

2) 試験2：播種深度と苗立ちの関係

供試品種は「モーれつ」、「スプライス」、「中国153号」で各100粒ずつを、播種深度1cm、3cm、5cmでコンテナに播種した。30℃に設定された恒温器内に設置し、播種から25日目に苗立ちの調査を行った。調査期間中の散水は適宜実施した。

2. 結果および考察

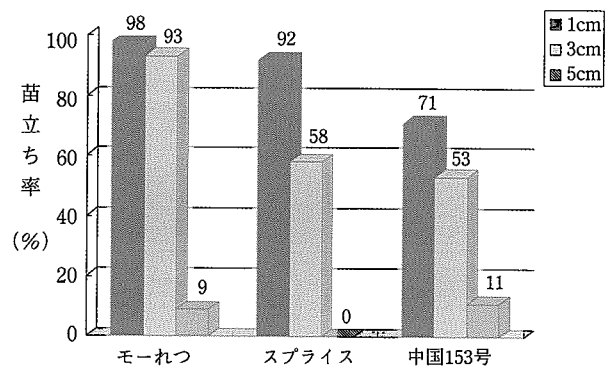
1) 試験1

播種方法と苗立ち率の関係は、いずれの区でも散播での苗立ち率は低く、点播や条播といった播種方法に変えることで向上する傾向が認められた。また、各試験区間と苗立ちの関係は、散播では9%~51%とバラツキが見られた。一方点播では試験区間の差が小さくなり、さらに条播では各試験区の処理内容に関わらず70%前後の安定した苗立ちを確保した（第1図）。

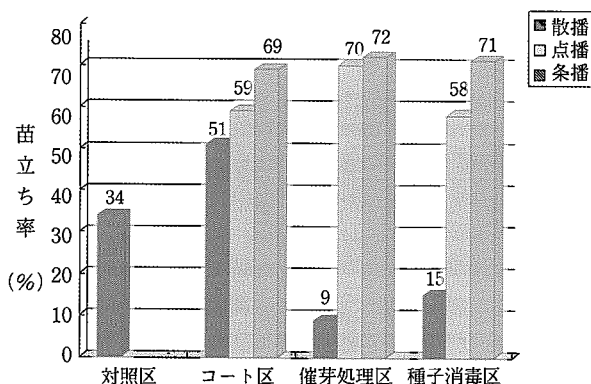
2) 試験2

第2図に示したとおり、播種深度が深くなるほど地表への出芽率は低下し、5cmでは0~10%前後の苗立ちであった。出芽しなかった種子を調べたところ土中での発芽は確認できたため、苗立ち率の低下は深さが大きく影響していると推察された。

以上の結果から乾田直播栽培において、安定した苗立ちを確保するためには点播や条播により種子同士を接近させる播種方法が有効であること、また播種の深さは3cmが限界であると考えられた。本試験では土壌中の水分については取り上げていないが重要な条件の1つであり、生産現場において乾田直播栽培の導入可否の判断基準としても、さらに検討が必要と考えられた。



第2図 播種深度と苗立ち率の関係



第1図 播種方法と苗立ち率の関係